

は じ め に

京都・清水寺の 2018 年の漢字が「災」と発表になりましたが、平成 30 年度は「西日本豪雨」や「北海道胆振東部地震」など、全国各地で自然災害が多発した年でした。

本県でも、17 年ぶりの大雪（平成 30 年 1～2 月）の被害調査と復旧対策で始まり、5 月のアラレ害、7 月の豪雨被害、7～8 月の高温少雨、度重なる台風の襲来（20 号、21 号、24 号、25 号）によるハウス等の被害と、天候に翻弄された一年間でした。

被害を受けられた皆様にはお見舞い申し上げますとともに、くじけることなく速やかに復旧し、営農再開されたことに心より敬意を表します。

また、災害対応に当たっては、市町、JA、農業共済組合など関係機関が密に連絡を取り合い、被害状況把握と復旧支援対策の実施に尽力されたことに感謝いたします。

改めて、関係機関が日頃から、現場情報の共有や連携した活動体制づくりに取り組む大切さを実感いたしました。

さて、今年の営農状況をふりかえると、園芸作物では、大雪による施設野菜の面積減少、豪雨によるかぼちゃ等の病害、高温少雨による果菜類や果実の肥大不足及びブロッコリー等秋野菜の生育不良、台風によるハウス被害にも関わらず、皆様の懸命のご努力により、作柄はほぼ前年並み又は若干下回る結果にとどまりました。

また、水稻では出穂後の水管理の徹底等により平年並みの単収を確保し、目標である一等米比率も 4 年連続 90%以上を達成しました。また、日本なしやぶどう等の果実類も夏の多日照により糖度が高く、美味しかったと聞いております。

担い手関連では、10 年ぶりに「知事懇」開催地となり、県下約 180 名の参加者を地元関係者約 90 名でもてなすという地域を挙げた行事となりました。準備も含め約 8 ヶ月間、協議会役員や関係機関の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

また、新たな指導課題であるトヨタのカイゼン方式を活用した経営改善については、管内の 4 農業法人をモデル経営体として重点的に指導しています。製造業と農業の違いから戸惑いもありますが、実施法人からは「取り組んで良かった」との声があり、管内に広く普及できるよう、引き続きモデル育成に取り組んでいきます。

最近、マスコミ等で取り上げられる「スマート農業」については、小松トマトで ICT で収集したハウス内環境データ（気温など）を活用して「出荷予測システム」を開発し試行しました。

また、ルビーロマンでは、県農林研と果樹普及指導員が協力して開発した「タブレットを使った学習システム」を実用化し、若手ぶどう農家を中心に実施したところ、著しい学習効果の向上が確認できました。

ICT、IoT、AI 等なじみのない用語が飛び交う昨今ですが、要は「人がしていたことをコンピューターや機械にさせて省力化するもの」と理解すれば、今後、益々利用場面が広がりそうです。引き続き、現場での活用方法の検討を続けていきます。

今年の一歩の快挙として、小松能美地区農業青年グループが第 58 回全国青年農業者大会で活動報告し、「農林水産大臣賞」を受賞しました。クラウドファンディングや小松商工会議所との交流など、若者らしい発想で地域と積極的に関わる活動を高く評価されました。次世代を担う農業者が着々と育ちつつあることを実感しています。

最後に、私ども南加賀農林総合事務所は、農業者や関係機関など地域の皆様と連携しながら、農業の発展と農村地域の活性化を支援することが使命であります。すべての普及指導員がこのことを肝に銘じて、今後とも普及活動を推進して参りますので、引き続き、皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 31 年 3 月

南加賀農林総合事務所
農業振興部部長 高 順 一 郎